

乳癌の診断法には問診・視診・触診、マンモグラフィー、超音波（エコー）検査、細胞診、生検などがあります。その他、CT、MRI、PETなども行われます。

1) 問診・視診・触診

前回述べましたような様々な症状で乳腺外来を訪れる女性に対して、どのような対応をとるのでしょうか。

・問診

まず、問診を多くの場合にはアンケート形式で書面に書いてもらいますが、さらに詳しく質問をして補足します。これにより乳房の症状がどのようなものであるか、いつから始まったか、例えばしこり（腫瘤）が次第に大きくなったか、しこりの様子、痛みを伴うか、月経（生理）前に大きくなり、張ってくるかなどにより、おおよその見当がつきます。

また、年齢、月経がいつ始まったか（初潮）、いつ終わったか（閉経）、月経周期は順調か、最終月経の日にち、妊娠、出産児数、初産年齢、授乳は十分であったか、乳腺の病気（乳腺炎、乳腺症、繊維腺腫など）や乳腺の手術、病理検査の有無、ホルモン補充療法や経口避妊薬を服用したことがあるか、家族に乳癌に罹った人がいるか、などをお聞きします。これは、乳癌の危険因子の項でお話しましたように、乳癌になりやすい人（高危険群）となりにくい人（低危険群）を区別するのに役立ちます。

・視診・触診

引き続き、診察を行います。私は座位（座った位置）と診察台に仰臥位（仰向けの位置）で診察します。場合により両手を挙げた位置でも診察します。これは、乳房の下部の筋肉（大胸筋など）が緊張したり、緩んだりすることにより、乳房の皮膚表面の変化や乳房内部のしこりの様子が変化し、しこりを触れやすくなり、しこりの性格が判り易くなります。しこりがあれば、その上にマジックで印をつけ、エコーやマンモグラフィ検査の時のマーカーにします。

しこりがあれば、その性状を詳しく調べ、良性か悪性かを判断します。その1つのめどを表に挙げています。このような手順で診察し、エコーやマンモグラフィ検査が必要かどうかを判断し、これらの検査を行います。

		悪性 乳癌	良性 乳腺症	良性 繊維腺腫
好発年齢		40～60歳	30～45歳	20～35歳
皮膚変化		早期なし 進行すると陥凹、 浮腫、発赤、 えくぼ症状 (dimpling)	なし (大嚢胞では青色 に透見することあり)	なし
乳頭変化		時に陥凹、びらん	なし	なし
乳頭分泌		時にあり (血性多い)	時にあり (乳汁様多い)	なし
腫 瘍	境界	不明瞭	やや不明瞭	明瞭
	表面	凸凹不平	顆粒状、やや凸凹不平	平滑
	硬度	硬	やや硬、弾性あり	やや硬～硬い
	形状	不整	不整、硬結	球形、卵形
	波動	なし	大嚢胞ではあり	なし
	癒着	なし→出現	なし	なし
	可動性	やや良→不良	良好	良好
	多発性	少ない	多い、または両側性	時にあり
圧痛		稀	月経前に増強	なし